



【第19回ゲスト】

# 武政盛博氏

上

高知県 JA高知県代表理事組合長

【インタビューとまとめ】

石田正昭

京都大学 学術情報メディアセンター 研究員

JA高知県が今年一月一日、発足した。県域JAとしては、JAならけん、JA香川県、JAおきなわ、JAさが、JAおおいた、JAしまね、JA山口県などがある。県域JAの評価はまだ定まっていなかったが、スケールメリットを生かした運営で各種サービスの充実をはかることは組合員の希望でもある。

より一層貢献することにあります。「すべては組合員のために」という意気込みでやっています。

気候条件を生かした施設園芸（野菜・果樹・花き）を中心に、水稲や畜産の分野でも統合のメリットを発揮したいと考えています。たとえば購買品手数料の引き下げも、県域JAのなかで取り組んでこそ無理なく達成できると思っています。われわれは「県域JAで自己改革を加速する」と解し、実行しています。

石田 役員体制はどうなっていますか。

武政 JA高知県の本所には、統括本部と四つの事業本部を設置しています。組合長のわたしはJA四万十の組合長、副組合長の秦泉寺雅一氏はJA南国市の専務で、ともにJA出身です。

その他の常勤役員については、統括本部担当専務は中央会、信用共済担当専務はJA土佐香美、経済担当専務は園芸連から出ていま

# 県域JAで自己改革を加速する！

## すべては組合員のために

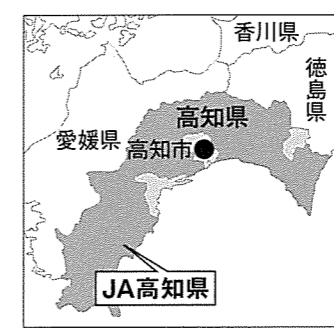
石田 二〇一九年一月一日にJA高知県が誕生しました。その経過を簡単に説明ください。

武政 県下一五JAのうちの一二JAが一つになり発足しました。一〇年三月のJA中央会臨時総会

「県域JA構想」を決議してからおよそ九年が経っています。各連合会との統合もめざしたのですが、このタイミングでは参加しないJAがあったり、法律的に無理なところもあって、完全にとい

うわけにはいかず、現時点で可能な連合会機能を県域JAに組み込むという結果になりました。

県域JAの設置の目的は、どこも同じですが、JA運営や事業の高度化、経営の効率化をはかり、農業の振興や地域の活性化に



す。常務は統括本部がJA土佐あき、信用事業本部が信連、共済事業本部がJAコスモス、営農販売事業本部がJA高知はた、購買事業本部が全農こうちから出ています。また三人の常勤監事はいずれもJAの出身です。このように、JAと連合会から人材を集め、出身にとられない配置をしています。

地区も旧JAごとに設置するのではなく、県内を七地区に分け、地区本部をつくっています。地区本部と旧JAが一致しているところをのぞいて、旧JAのやり方を

そのまま地区に持ち込むことはできません。ですので、旧JAは各地区で合併前から何回も協議を重ねてきました。

石田 ということは、営農経済センターなどの諸施設も地区のなかでの共同利用がすすみ、事業の高度化、経営の効率化がはかれるというわけですね。

武政 そのとおりです。石田 合併効果は本所、地区の両方で出さなくてはなりません。武政 合併後の存続法人をJAコスモスとし、決算期は四月〜三月としました。このため、JA高知

の第一期決算（一九年一月一日〜三月三十一日）は、JAコスモスをのぞく一JAは今年一月〜三月、JAコスモスは昨年四月〜

県第一期決算（一九年一月一日〜三月三十一日）は、JAコスモスをのぞく一JAは今年一月〜三月、JAコスモスは昨年四月〜

JAの第一期決算（一九年一月一日〜三月三十一日）は、JAコスモスをのぞく一JAは今年一月〜三月、JAコスモスは昨年四月〜

JAの第一期決算（一九年一月一日〜三月三十一日）は、JAコスモスをのぞく一JAは今年一月〜三月、JAコスモスは昨年四月〜

JAの第一期決算（一九年一月一日〜三月三十一日）は、JAコスモスをのぞく一JAは今年一月〜三月、JAコスモスは昨年四月〜

JAの第一期決算（一九年一月一日〜三月三十一日）は、JAコスモスをのぞく一JAは今年一月〜三月、JAコスモスは昨年四月〜

## 生産資材価格の引き下げをめぐる

石田 JAコスモスを存続法人とした理由は？

武政 定款変更をなるべく少なくしようとしたからです。合併に当たって各JAはどういう事業をやっているのかを、各JAの定款を使って調査したのですが、そのなかでJAコスモスが全体をカバーできるような数多くの事業をやっ

ていることがわかりました。JAコスモスには役員選任規程や定款など諸規程の変更のために理事会や総代会を開いていただいたので、苦労をかけてしまいました。

石田 第一期は減損、特例業務負担金（農林年金）、全農施設の買戻しなどを反映した決算となるようですね。

武政 合併を機に整理できるものは整理しました。来期は信用事業収益の減少が見込まれますが、そうであっても黒字決算とすることが可能です。

**JA高知県** (高知県農業協同組合)

**組織の概況** (平成31年3月末日)

組合員数.....86,037人  
(正組合員 44,749人  
准組合員 41,288人)

役員数.....77人(常勤・非常勤含む)  
職員数...2,333人(嘱託・臨時・パートを含む)  
(出向者含まない・受入出向者含む)  
※職員数は令和元年5月1日現在です。

**地域と農業の概況**

県内12JA (JA土佐あき・JA土佐香美・JA土佐れいほく・JA南国市・JA長岡・JA十市・JA高知春野・JAとさし・JAコスモス・JA津野山・JA四万十・JA高知はた)と連合会機能が統合し、2019年1月1日に誕生。高知県は、温暖で冬期の日照時間が長い恵まれた気候と海岸から四国山地までの変化に富んだ自然が特徴。温暖で多日照の気候を活かしたハウス栽培を中心に園芸農業(野菜・果樹・花き)が発展し、ナス・ミョウガ・ニラなど全国屈指の園芸産地。山間部では、夏期の冷涼さを活かした園芸作物や、幻の和牛「土佐あかうし」など肉用牛を生産。平場から山間部まで、地域特性を活かした多様な農業を展開。

**JAのデータ** (平成31年3月末日)

設立 平成31年1月1日  
本所所在地 〒780-8511 高知県高知市北御座2-27

出資金.....111.9億円  
販売品販売高.....720.0億円  
購買品供給高.....295.0億円  
貯金残高.....6,772.3億円  
貸出金残高.....701.0億円  
長期共済保有高.....2兆2,011.2億円

す。また、地区運営委員会の活発化によって、合併時の役員定数の削減にも取り組まなければなりません。

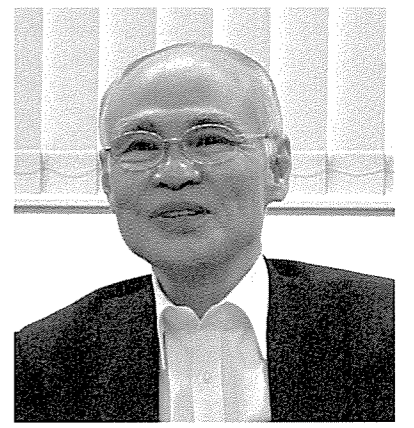
**石田** 一つのJAになったからには間接部門の合理化は重要です。

**武政** 加えて、生産資材価格の引き下げにも取り組みたい。これについては組合員にも合併メリットの目玉として説明してきました。

具体的というと、肥料と農薬のそれぞれ五〇品目について、どこにも負けないだけの価格を出していきます。当用平均価格でみて、おおむね肥料で五%、農薬で一〇%の引き下げを見込んでいます

が、市況的には値上がり基調にあるので、むしろいいことも事実です。

価格引き下げの努力は一過性のものであってはいけません。これからも継続的に努力していきます。また、組合員への説明責任をはたすという意味で、価格形成の透明性の向上にも努めます。この点に



**いしだまさあき**  
1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。前・日本協同組合学会会長。三重大学教授、龍谷大学教授を経て現職。著書に「JAで「働く」ということ～組合員・地域とどう向き合っていくのか」「JA自己改革から切り拓く新たな協同「上からの統治」に挑む「下からの自治」」(以上、家の光協会)など多数。

については全農本体内にも協力してもらわなければなりません。

**石田** どういう意味ですか。

**武政** たとえば、競争入札を実施して、全農が負けたとします。そのとき、負けたら負けたで終わりにするのではなく、次からは一番札を出した業者に負けないだけの価格を出してもらいたいという意味です。

全農が、一番札を出した業者から買入れることだってできます

よね。奇想天外かもしれないが、そうしてでも全農には一番札を出してもらいたいのです。というのは、仮に全農とのあいだで商流・物流における一体的な情報システムが構築できれば、それを活用することでJA高知県は、配送を含む少量多品目供給体制を完成させることができるからです。

### 農商工連携を推進する

**石田** 今日の朝食は、南国市地区の「あぐり食堂 ほっと」に行つて、モーニングセットをいただきました。

**武政** あそこは南国市地区の女性が運営する県内初の農家食堂です。四月十九日にオープンしたばかりです。なかなか農地転用の許可が下りなかったのですが、尾崎正直高知県知事の後押しもあり、八年越しの要望が実りました。地産地消の推進、隣接する直売

園芸資材の世界は、取扱品が少量多品目に及ぶので、全農本体の競争相手はいっぱいいます。むしろ競争相手のほうが強いという現実があります。そのことを直視したうえで、仕入れから配送までの一貫体制を完成させることが重要な課題となっているからです。

それができなければ、園芸王国・高知県のなかで、JA高知県の存在価値は出てきません。

所「かざぐるま市」との相乗効果、女性部の活動拠点づくり、地域住民との交流の場づくり、地域特産物物流の伝承といった目的があります。直売所の横、道路沿いに設置しました。

南国市地区の女性部員は五五〇人ですが、そのうちの二三〇人が直売所の出荷者(加工部員七〇人を含む)となっています。直売所のお客さんだけではなく、朝の直売所への納品後に立ち寄る女性部

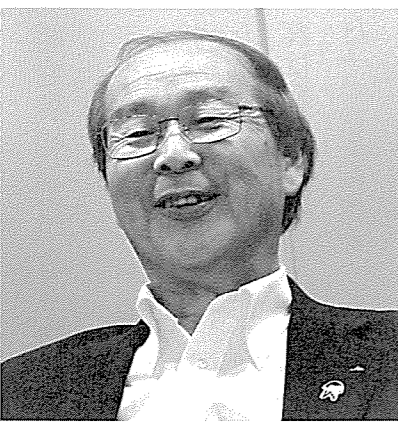
員も多く、大いに繁盛しています。

**石田** 営業は午前七時半～午後二時、火曜定休ですが、準備のために早番は朝六時に出てくるそうですよ。責任者の高橋幸子女性部長によれば、「毎日の仕事なので大変ですが、シフト制をとっている

ので、自由な働き方が選択できます」といっていました。

### たけまさもりひろ

1951年高知県四万十町生まれ。1970年窪川町農協入組、1988年管理課長、2000年四万十農協参事、2002年専務を歴任し、2009年四万十農協代表理事組合長に就任、2019年高知県農協代表理事組合長に就任、現在に至る。



ウスもあつたでしょ。

**石田** そこにも行ってきました。

**武政** わが出身地の四万十町はトマトですが、南国市はパプリカに挑戦しています。JA出資農業生産法人「株南国スタイル」の農業の高軒高ハウスを設置し、産官学連携のもとで実証実験を行っています。通常のハウスでは一〇アール

ル当たり八トンが限界ですが、ここでは自動環境制御装置を使って一五〜一六トンの収穫が可能です。従事者は七人だけです。今年二年目で試行錯誤の連続ですが、計画では年間一〇〇トンをCGCグループ四国に販売していきます。

コメと露地野菜主体の南国市農業を根本的に改めたいという強い意気込みで臨んでいます。

**石田** 何といつても出資法人の専務がすばらしかった。

**武政** JA高知県を設置したことで、先進事例、優良事例の横展開が可能になっていることも大きい

**JA**

### 全国最大級の農産物直売所「とさのさと」

売り場面積1,558㎡の「とさのさと」は、今年4月9日オープンした。売り場面積1,463㎡の「サニーマート」は、通路を隔てて隣接している。これにセレクトショップ、レストランなどを備えた食のテーマパーク「アグリコレット」(コレットはイタリア語で“襟”)が、今年9月にオープンする。

サニーマートとの連携は信連や中央会が関係しているそうだが、サニーマート社長の炯眼によるところも大きい。高級スーパーと農産物直売所(水産物も扱う)の相性の良さを感じ取り、県都に新たな商業地の賑わいを生みだそうとした結果ではないか。

確かに、並んでいるものが違う。営業時間もピーク時間も違う。ウインウインの関係といえばそれまでだが、そこには商業者のきちっとした「読み」があると見た。(石田正昭)

です。オランダ型の新技術導入に關しても、県を通して商工業者、大学などの研究機関との連携が容易になっています。

**石田** 合併メリットのひとつとしてよいでしょうね。

**武政** 農商工連携という点では、高知市北御座、すなわちJA高知県の本所の隣接地に出店した食の複合施設「とさのさと」もその一つです。これは県内で評判の高いスーパーマーケット「サニーマート」に併設する形で設置しました。サニーマートの本社用地(物流基

地、とさのさと御座店を併設)のうち、二万平方メートルを活用し、旧「とさのさと」を移設、拡張したものです。

当初、農産物直売所のコンサルタントには、この企画は受け入れられませんでした。サニーマートが「競争相手」だったからです。しかし実際は違った。サニーマートとの相乗効果が生まれたのです。年間二〇億円の販売が見込めます。県都に新しい商業集積地が生まれ、人の流れが変わりました。(以下、次号につづく)



【第19回ゲスト】

# 武政盛博氏

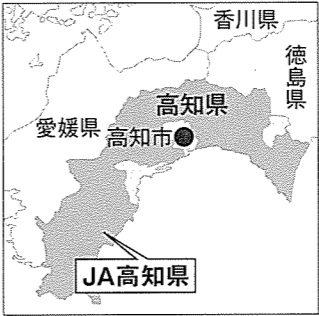
高知県 JA 高知県代表理事組合長

下

「インタビュートマトめ」  
石田正昭

京都大学 学術情報メディアセンター研究員

ハワイにある大木「モンキーポッド」になぞらえてJAのあるべき姿を思い描く武政組合長。組合員をはじめ、大勢の人が自然に集まってくる、地域の傘にしたと願っている。今回は「地域に根ざすJA高知県」について、その具体像に迫ってみたい。



# 県域JAで自己改革を加速する！

## 県域JAに期待される横展開

武政 「とさのさと」はJA全額出資の子会社で、今回県域JAに参加しなかった三丁JAも出資しています。県内全JAから出荷されてきますが、遠隔地区は輸送をJAが担当し、近隣地区は生産者の

持ち込みです。遠隔地区の出荷品は近隣地区よりも遅れて陳列されますが、これが午後の商品補充の役割をはたし、いつ来ていたたいでも利用者が満足できる直売所となっています。とくにキュウリ、ナス、トマトは閉店時間の十九時

まで残すようにしています。訴求ポイントは県全域の農水産物の直売所であることに置いています。また、協同組合間連携の観点から、生協、漁協、森林組合の協力も得ています。商品については、値は少々張るのですが、土佐あかうしはヘルシー志向の消費者に受け入れられていますし、四万十の米豚もコクがあつて柔らかいと好評です。フルーツトマトや小夏などは箱単位で売れています。

出荷者はおよそ一四〇〇人ですが、そのうちの約三割が地元のJA高知市の組合員。大規模な直売所になったので、出荷者は増え続けていますが、更なる出荷者の拡大、とりわけ夏の出荷者の拡大に取り組んでいます。

石田 「とさのさと」の運営は園芸連がおやりですか？

武政 いいえ。もともと「とさのさと」は旧全農ここのワンセクションでしたが、合併にともないJA高知の子会社となりましたので、直接「とさのさと」が運営しています。

県外出荷は営農販売事業本部の担当ですが、東京、名古屋、大阪の県外事務所に加えて、今回、仙台、金沢、広島にも事務所を設け

ました。県域JA発足の目玉として、消費者・実需者への営業活動の強化と単価アップをめざしています。たとえば、金沢では、石川だけではなく、富山、福井、新潟も含めたエリアマーケティングに取り組んでいます。産地と消費地をつなぐ情報発信の強化と販売最前線に立つ人づくりという観点から導入しています。

果物売り込んできました。JA高知県を知ってもらおうと、絶好の機会となりました。生産者部会の統合にも力を入れており、重点園芸品目を対象に、県域品目部会を立ち上げています。当初はキュウリ、ピーマン、シシトウ、ナス、ニラ、シヨウガ、オクラ、小ナス・米ナス、ミヨウガ、ユズからスタートし、県域での共同計算、

石田 新設の東京・豊洲市場へは尾崎正直高知県知事とトップセールスに出かけていますね。

武政 旧JAの枠を超えた品目や集出荷場の集約、包装作業、精算

武政 今年の二月一日、全国の生産・出荷団体に先駆けて、シヨウガ、ミヨウガ、ユズなど、旬の青

「独禁法違反」は論外

共販体制を構築していきます。石田 輸送園芸地帯としての実績をベースに、県域JAの可能性を広げる取り組みですね。

武政 県内の営農指導員一九〇人のなかから、リーダーとなりうる二四人をピックアップし、県内の高い技術や病害虫等の新たな対策などを組合員に迅速に提供できるようにします。同時に、新人指導員をベテラン指導員に帯同させることで指導員の資質向上もはか

経営指導については、旧JAのあいだで取り組みに差のあった記帳支援、経営分析を通じた経営指導、意欲ある農家への個別経営指導などのサービスを、県内のどの地区でも受けられるようにしていきます。

石田 県域JAだからこその取り組みですね。ところで、こうしたJAの努力をまったく評価していないのが、旧JA土佐あきの「ナスの共販」に関する東京地裁の棄却判決でした。

武政 そのとおりです。共選・共販にあたって、組合員が協同の規律を守ることはきわめて重要です。



**JA高知県** (高知県農業協同組合)

組織の概況 (平成31年3月末日)

組合員数.....86,037人  
(正組合員 44,749人  
准組合員 41,288人)

役員数.....77人(常勤・非常勤含む)

職員数...2,333人(嘱託・臨時・パートを含む)  
(出向者含まない・受入出向者含む)

※職員数は令和元年5月1日現在です。

---

地域と農業の概況

県内12JA (JA土佐あき・JA土佐香美・JA土佐れいほく・JA南国市・JA長岡・JA十市・JA高知春野・JAとさし・JAコスモス・JA津野山・JA四万十・JA高知はた)と連合会機能が統合し、2019年1月1日に誕生。高知県は、温暖で冬期の日照時間が長い恵まれた気候と海岸から四国山地までの変化に富んだ自然が特徴。温暖で多日照の気候を活かしたハウス栽培を中心に園芸農業(野菜・果樹・花き)が発展し、ナス・ミヨウガ・ニラなど全国屈指の園芸産地。山間部では、夏期の冷涼さを活かした園芸作物や、幻の和牛「土佐あかうし」など肉用牛を生産。平場から山間部まで、地域特性を活かした多様な農業を展開。

---

JAのデータ (平成31年3月末日)

設立 平成31年1月1日

本所所在地 〒780-8511  
高知県高知市北御座2-27

出資金.....111.9億円

販売品販売高.....720.0億円

購買品供給高.....295.0億円

貯金残高.....6,772.3億円

貸出金残高.....701.0億円

長期共済保有高.....2兆2,011.2億円

お詫びと訂正 ●「トップ対談19 組合員・地域とともに」8月号P5で表記の誤りがありました。JA高知県「組織の概況」の欄で、(誤)(平成31年3月末日)とあるのは、(正)(平成31年3月末日)でした。お詫びして訂正いたします。

戦前の園芸組合を母体とする支部園芸部からすれば、当然のことをやっていただけなのですが、その規約のなかに「除名」とか「罰金（反当徴収金）」という表現があった。公取委は、この表現をしてJAが書き換えさせなかった、あるいは改善の指導をしてこなかったことが問題だと指摘し、だから「JAは独禁法違反だ」というのです。しかし、これはどう考えてもおかしい。論外です。

**石田** そのとおりです。

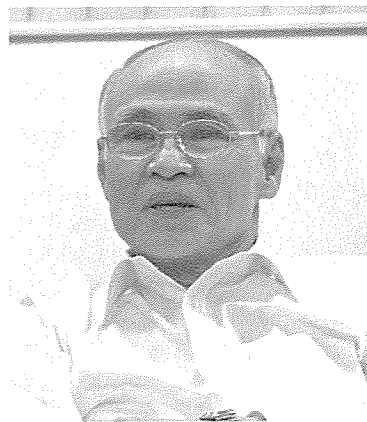
**武政** ということで、去る四月十一日に東京高裁へ控訴しました。

JAはもとより、農家側（支部園芸部の人びと）も納得できないです。

旧JA土佐あきの支部園芸部（園芸組合）は一〇〇年近くの歴史があって、JAの歴史よりも古い。農家側は販売の主導権は支部園芸部にあると考えていました。

そういう状況のなかでJAが独禁法違反に問われるというのは心外

**いしだまさあき** 1948年生まれ。東京大学大学院退学。農学系研究科博士課程修了。専門は地域農業論、協同組合論。前・日本協同組合学会会長。三重大学教授、龍谷大学教授を経て現職。著書に「JAで「働く」ということ～組合員・地域とどう向き合っていくのか」「JA自己改革から切り拓く新たな協同「上からの統治」に挑む「下からの自治」」（以上、家の光協会）など多数。



だろうか。そういうJA土佐あきを「独禁法違反だ」というのは、いいがかりに近い。公取委や国のねらいは、農業者のいいところを認め、奨励すること、JA販売事業を弱体化させることにあると考えられます。

基本的に、協同組合に対する理解が不足しているといわざるをえません。

**石田** 東京地裁の判決を読むと、ナスの販売委託について、「土佐あき農協が組合員から販売品の販売委託を受ける旨定めた販売業務規程の適用があったと推認することができ」と述べ、あくまでも推認としています。推認だけで独禁法違反とされたのはたまりません。東京高裁では、このあたりを争点とすべきだと思います。

## 「モンキーポッド」になるJAをめざして

**石田** その安芸地区（旧JA土佐あき）では、「農福連携」にも取り組んでおられますね。

**武政** ナス産地の安芸地区では人手不足が深刻で、二〇〇三年から無料職業紹介事業に取り組んできました。そうしたなかで新たな課題として、障がい者・ひきこもり

重ねるうちに労働力確保と就業支援とをマッチングさせた「農福連携」が構想され、昨年、JA、安芸市、高知県（出先機関）、福祉機関らによって「農福連携研究会」を発足させました。

の就業が浮かびあがってきました。福祉機関の専門家の方々と検討を

障がい者・ひきこもりを実際に雇用する農家や、雇用を検討する農家が集まり、雇用する際の課題や不安を議論することで、実際の

就農に結びつけようとしています。

農家からは「とても助かっている」という声が多く、障がい者・ひきこもりの雇用促進と労働力不足の改善を同時に達成できるようにしたいと考えています。

**石田** 新しい農業の姿として、横展開にも取り組んでほしいですね。ところで津波対策も大きな課題となっていますが…。

**武政** 現在、県内には全部で七〇の集出荷場があります。そのうちの五八をJA高知県が所有していますが、残念ながらそのうちの二七の施設で津波被害が予測されて

います。

津波だけではなく施設の老朽化もすすんでいますので、高知県とも協議しながら、施設の集約や整備をすすめていきたいと考えています。関連して、園芸連がもっていた「JA園芸流通センター」も

津波被害が予測されています。太平洋に面した高知新港にあって、被害は免れません。これについても県と協議しながら善処していく所存です。

**石田** 最後ですが、JA高知県のめざす姿をお聞かせください。

**武政** 一五年ほど前、JA四万十の若い職員から「JAの利用者は高齢者が多いですね」といわれました。そこで若い人たちにも利用してもらおうと始めたのが、食農教育を中心とする教育文化活動でした。合併したJA高知県でも、

目的別の小さな組織をたくさんつくり、食と農を基軸とした教育文化活動や福祉活動を積極的にすすめていきたいと思っています。

**旧JA四万十の興津支所**

昨年の2月末、前任の龍谷大学農学部1期生のうち、石田ゼミに所属する7人の学生を引率して、旧JA四万十を訪れ、地域の農業とJAの事業を学んだ。

ニラ、ピーマン、ミョウガ、ショウガのほか、有名な仁井田米（カントリーエレベーター）やデュロックファームなども見学した。学生たちは皆、その技術の先進性に驚いた様子であった。

なかでもミョウガ、ピーマンで一大園芸団地を形成している興津支所は印象的だったようだ。農業者や支所職員の丁寧な説明にも感動していた。ただそこは太平洋に面した低地にあって、津波が確実に押し寄せる場所でもある。このことをふまえて津波対策も順次すすめられていた。

夜は、武政組合長に盛大な歓迎会を開いていただいた。このゼミ生のなかから、JAに2人、生協連に1人、信連に1人就職したことを報告しておきたい。感謝。（石田正昭）

わたしが思い描くJAの姿は、ハワイにある大木「モンキーポッド」です。大地に深く根を張り、

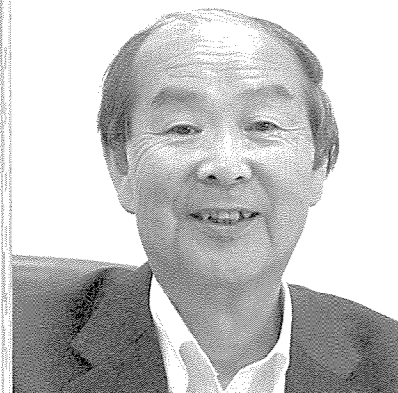
が自然と集まってくる。地域の傘でありたいと願っています。

大きく枝葉を広げたこの木の下に、雨や日差しを避けて数多くの人が集まり、食べたり飲んだりおしゃべりをしたりするなかで、新しい絆が生まれてきます。

JA高知県の設置によって、地域の傘を支える「根っこ」は大きくなり、またそこに集まる人びとも増えました。単純に人が増えるだけではなく、声が聞こえやすく、意見交換もしやすくなったといわれるようなJAになりたいと思っています。

モンキーポッドの「枝」や「葉」は、女性部や青壮年部、生産部会などの組織とその活動を指しており、「花」や「実」を付けて人びとを楽しませる大切な存在です。組合員をはじめ、大勢の人

組合員や地域住民と力を合わせ、高知県の農業と地域が発展するよう努力していきます。（終・取材 令和元年五月九日）



**たけまさもりひろ** 1951年高知県四万十町生まれ。1970年窪川町農協入組、1988年管理課長、2000年四万十農協参事、2002年専務を歴任し、2009年四万十農協代表理事組合長に就任、2019年高知県代表理事組合長に就任、現在に至る。